

ワークショップ:「哲学的」という神話:
哲学教育とは何をする事なのか

どのように教えれば哲学を教えたことになるのか:
「哲学的」という神話の死と再生

稲岡大志(大阪経済大学)
応用哲学会 第11回年次研究大会
2019年4月21日 於:京都大学

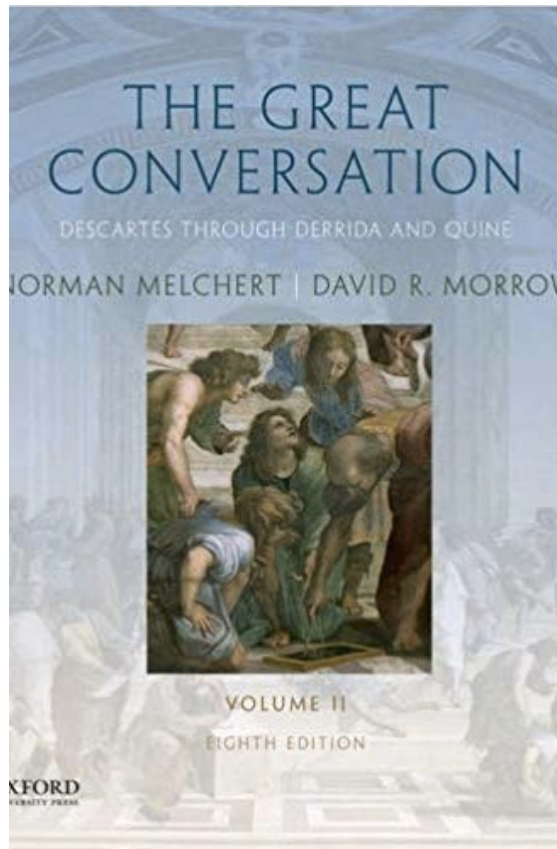
発表の概略

- 「哲学的」という神話を解体する笠木提題に一定の共感と理解を示しつつも、哲学の外側ではそうした「神話」がかなりの意味合いを持っていることを指摘する。
- 刑務所、ビジネススクール、大学（非哲学コース）、での哲学の受容を紹介。
- それらの事例を通して、新しい「哲学的」という神話をつくることのできないかを検討する。

直面している課題

- 何をどのように教えれば哲学を教えたことになるのか。
- この問いへの答えは、どこで、どういう人に哲学を教えるのか、に応じて変わってくる。
- とりわけ、哲学を学ぶことの意義に関しては、哲学専攻コースと、それ以外とでは、教師が直面している課題はかなり異なっているはず。

Norman Melchert + David R. Morrow, *The Great Conversation: A Historical Introduction to Philosophy* (2018)



- 哲学史のスタンダードな教科書。
- 各哲学者の解説、用語集、発展的問題から構成されており、大学生が教科書として学ぶのに最適。
- 版を重ねるたびに問題もアップデート。たとえば、中国語の部屋の章では、「Siriに心はあるか？」といった問題も。
- とはいえ、そこでアピールされる哲学を学ぶ意義は、意外と保守的。
- 「哲学は論証とイノベーション」
- 「考えることは技能の一種」
- 「過去の哲学者の考えた問題はいまでも考えるに値する」

哲学外部での「哲学的」という神話

- 哲学内部から哲学教育の意義を打ち出そうとすると、笠木提題のようなジレンマ(分野の独自性を強調すると歴史的・制度的変遷を無視することや分野の一部の強調に繋がる)が不可避。
- では、哲学の外部では哲学教育の意義はどう捉えられているのだろうか？

刑務所での哲学 (Philosophy in Prisons)

- 「刑務所での哲学」を研究するKristine Szifrisは、2014年の9月から12月までイギリスの刑務所（バッキンガムシャーのグレンドン刑務所）で、囚人たちに哲学を教えた。（2015年夏にはフル・サットン刑務所でも実施）
- 過去の哲学者について教えるのではなく、ソクラテスメソッドを用いて、「社会はどうあるべきか」「良き人生とはなにか」「モラルとはなにか」といった問いについての議論を囚人たちとおこなった。
- 刑務所内で実施されるセラピーとは異なり、囚人の過去や犯罪には触れず、抽象的な哲学の議論を行った。
- 結果として、囚人たちは、自分自身の人格を（犯罪行為に焦点を絞ることなく）全体として一つの人格として捉えるようになった。

- 囚人は具体的な自分の行為と向き合うセラピーと、抽象的で非人間的な概念を扱う哲学的対話が相互補完的であることを実感。自分の考えに固執せず、他人の考えを受け入れる姿勢が身に付いた。
- また、犯罪者としてではなく、一人の人格として扱われることで、囚人にとっては、自分自身の人生の哲学についても熟考する機会となった。

Prison University Project

ABOUT US

WHAT WE DO

GET INVOLVED

RESOURCES

DONATE

NEWS



PRISON
UNIVERSITY
PROJECT



ADVOCACY

EDUCATION

OUTREACH

エディンバラ大学の取り組み

- 哲学者Duncan Pritchardが中心となり、囚人への哲学教育を実施。
- 囚人の5分の1は読み書きもできない状態。
- 目指すところは「クリティカルシンキングと対人技能」の習得。
- Low Moss 刑務所と Cornton Vale 刑務所の囚人たちに7週間の哲学教育を実施。
- 自分自身や自分の体験については語らせず、哲学の概念についての議論をさせる。
- その結果、囚人たちは他人へのリスペクトと、他人の立場に立ってものごとを考える視点を手に入れる。
- <https://www.ed.ac.uk/ppls/philosophy/research/impact-and-outreach/philosophy-in-prisons>

ビジネススクールでの哲学教育

- ビジネスの現場やビジネス教育機関での哲学に対するリスペクトはわりと高い。(提題者の個人的実感)
- Rasche et .al (2013)による研究:世界のビジネススクールのトップ100校に関するThe Aspen Instituteの調査では、ビジネス倫理の科目を設けるビジネススクールは2005年から2009年で倍増。しかし、その75%が選択科目にとどまる。
- MBAの取得をまず優先させたいというスクールの要望と、それでもビジネス倫理は大事だという内部スタッフの葛藤。

- ビジネス教育に哲学が良い理由二つ (cf. Dhoul 2014) :
- 市場の理解が深まる。顧客という人間の理解が深まる。
- われわれの問に答えるのではなく、与えられた答えを問い直してくれる。
- ⇒常に批判的である哲学の態度や、問題の前提を取り出す手法がビジネスの現場でも有効であるとされる。

- ビジネススクールで哲学に求められていること:
- 自己自身や他人についての理解
- 人間の探求
- 常識を疑う態度
- 新しい価値を生み出す力

- Cleary (2017) : ビジネスを学ぶ学生が哲学を学ぶべき理由は、すべての学生が哲学を学ぶ理由と違いはない。
- ここでは、哲学教育によって得られるジェネリック・スキルの重要性が強調されている。

MSC IN BUSINESS ADMINISTRATION AND PHILOSOPHY

[Student Life](#)[Career](#)[Admission](#)

MSc in Business Administration and Philosophy

The MSc in Business Administration and Philosophy develops your skills in business philosophy by combining business economics and philosophy. This combination enables you to identify and solve complex challenges in private companies as well as private and public organisations through philosophical reflection and analysis applied to business theory and practices.

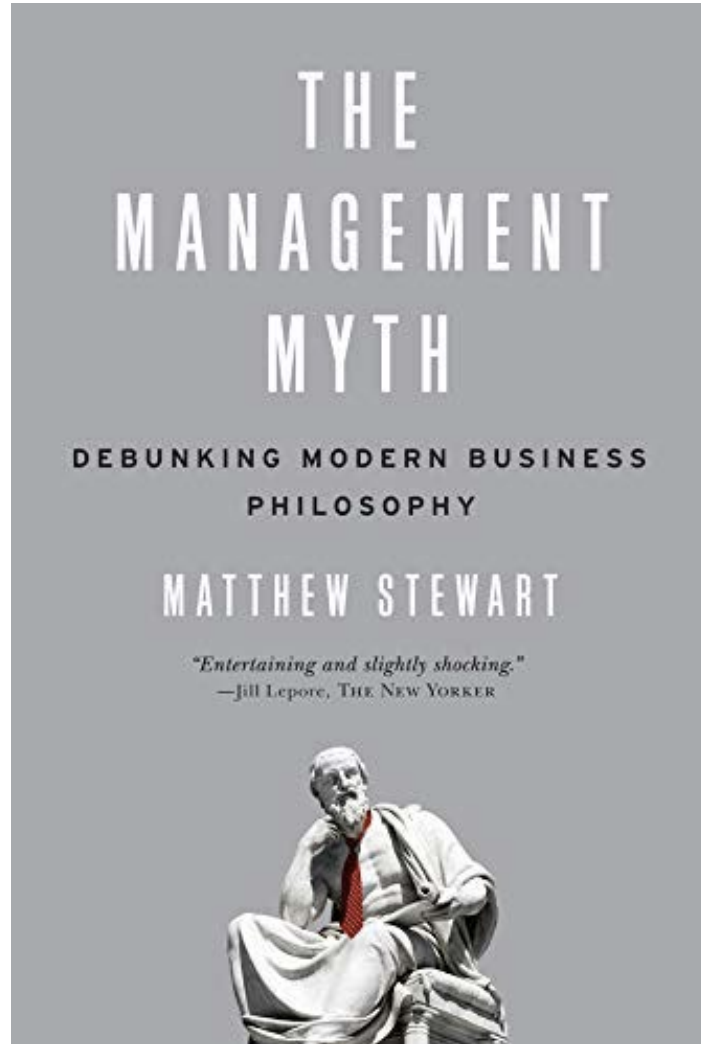


ADMISSION INFO MEETINGS - GRADUATE

Hear about the requirements and admission procedure at our [info meetings](#).

[連絡先](#)[CONTACT](#)

Matthew Stewart, *The Management Myth: Debunking Modern Business Philosophy*, 2010,



- 著者のマシュー・スチュアートはオックスフォード大学で哲学の博士号を習得後、経営コンサルタント会社に就職。
- 著述業にも従事。ライプニッツとスピノザの対決を描いた『宮廷人と異端者 ライプニッツとスピノザ、そして近代における神』などを刊行。
- 経営の知識ゼロでビジネスの現場に飛び込んだ自身の経験を振り返りつつ、哲学者こそが経営教育に向いているとする。

哲学教育に適した発達段階

- ハーバード大学教育学大学院教授のHoward Gardnerは、すべての学生は初年次と卒業年次に哲学の授業を取るべきとする。
- cf. multiple intelligences theory (言語的知能、論理・数学的知能、内省的知能など、人間の知能を8つに分類)
- 初年次は「人生の大きな問い」を一つ選んで授業を取る。
 - アイデンティティの問題。(私は誰?)
 - 目的の問題。(なぜわれわれはここにいるのか?)
 - 徳と悪徳の問題。(真理とは? 美とは? 道徳とは?)
 - 存在の問題。(生きるとは、死ぬとは?)
- こうした問題はあらゆる問題の出発点。
- 青年期後期 (later adolescence: 19~22歳くらい) になってようやくこうした問題を考えることができる知的発達の実現。

- 自分の専攻の学びでも、こうした大きな問題は関連している。哲学を学んでいると、自専攻で扱う問題に哲学の大きな問題がどう関連しているかがより容易にわかるようになる。
- 人生においてこうした大きな問題について指導を受ける機会は大学が最後。

魂の配慮

- 「世にも優れた人よ。あなたは知恵においても力においてももっとも偉大でもっとも評判の高いこのポリス・アテナイの人でありながら、恥ずかしくないのですか。金銭ができるだけ多くなるように配慮し、評判や名譽を配慮しながら、知恵や真理や、魂というものができるだけ善くなるようにと配慮せず、考慮もしないとは」(『ソクラテスの弁明』29D-E)

- 「ああ、これこそは、よい生まれの人でなければできないことだよ、カリクレス、君のその率直で徹底した議論の運びかたこそはね。他の人たちなら、心に思っている、口には出して言おうとしないようなことを、君は今、はっきりと述べてくれているのだからね。それでは、ぼくは君にお願いしておくけれど、どんなことがあっても、その調子をゆるめないようにしてくれたまえ。ひとはいかに生きるべきかということが、ほんとうに明らかになるためだから」(『ゴルギアス』492D)

「哲学的」という神話再訪

- 刑務所、ビジネススクール、大学(非哲学コース)などでは「哲学的」という神話は再生しつつある。
- 他人の考えを尊重する態度、自分の考えを明晰な言葉で表現する能力、抽象的なことについて考える能力、隠れた前提を明らかにさせる能力、根本的な問題に取り組む姿勢など、が重視されている。
- こうしたことは、かつて、あるいは、いま、哲学教育の中で教えられていることの一部。

まとめ:どのように教えれば哲学を教えたことになるのか

- 哲学科ないし哲学コース以外での哲学教育では、知識の習得や思考力の涵養、オープンマインドな態度の習得が重視される。
- これらは、他人の人格や価値観を尊重するという「態度」や「習慣」の習得につながる。こうした点が、哲学的神話を下支えする。
- 哲学の外部が哲学教育に期待することは、哲学内部から打ち出される哲学教育の意義とはぴったり重なるわけではないだろう。
- もちろん、外部からのニーズにどれだけ忠実に応えるべきか、は議論する必要がある。

文献(URLの最終アクセスは2019/04/18)

- Skye Cleary, “Philosophy for Business Students”, Blog of APA, posted October 2017.
- <https://blog.apaonline.org/2017/10/04/philosophy-for-business-students/>
- Tim Dhoul, “The Place of Philosophy in Business Education”, Top MBA, posted February 03, 2014.
- <https://www.topmba.com/why-mba/faculty-voices/place-philosophy-business-education>

- Howard Gardner, “Why We Should Require All Students to Take 2 Philosophy Courses”, The Chronicle of Higher Education, posted JULY 09, 2018.
- <https://www.chronicle.com/article/Why-We-Should-Require-All/243871>
- Howard Gardner, “Should We Require All Students to Take Philosophy?”, posted August 3 2019.
- <https://howardgardner.com/2018/08/03/should-we-require-all-students-to-take-philosophy/>

- Andreas Rasche, Dirk Ulrich Gilbert and Ingo Schedel, “Cross-Disciplinary Ethics Education in MBA Programs: Rhetoric or Reality?”, *Academy of Management Learning & Education*, Vol. 12, No. 1, 2013, pp.71-85.
- Matthew Stewart, *The Management Myth: Debunking Modern Business Philosophy*, W W Norton, 2010.
- Kirstine Szifris, “Philosophy in Prisons: Open Minds and Broadening Perspectives through philosophical dialogue”, *Prison Service Journal*, Issue 225, 2016 May, pp.33-8.